

サクラ

國兼 治徳

昨年4月上旬、大学時代の同期会が箱根の湯本で開催された。私は学年始めの忙しい時期であったが、休みを貰って参加した。新宿から小田急ロマンスカーに乗った。この線に乗車するのは初めてで、あかず車窓の景色を眺めていた。湯本は小雨のけぶる中だった。温泉行きのマイクロバスに乗り、最初に気付いたのは桜の花盛りであることだった。雨にぬれた桜を観るのは何年振りだろうと思いつつ、薄くれないのしっとりとした風情を眼に納めた。この街にも二度と来ることはないだろう。最近では出向いた旅先でそんなことが心をよぎる。そしてこの桜はソメイヨシノだろうかと考える。

私の記憶にある一番古い桜は、祖母につれられて見た砂川神社の花見だった。小学校にあがる前のことで、花見の最中にそそうしてしまった。祖母は大変困って帰りの汽車の中は身の縮む思いだったと、後年話をしてくれた。幼い桜の印象は私にとっていい思い出ではない。

次の桜は、一巳の小学校での思い出になる。この小学校は桜坂という地名の場所にあった。名前のおと、グラウンドを兼ねた前庭を囲んで、桜が沢山植えられていた。この小学校は終戦後まもなく農業高校に変わってしまい、私の母校は深川寄りに移転してしまった。私は学校の公宅に住んでいたため、その頃の遊び場は主に校庭であった。桜の満開も何度か経験したが、花に関心のある年でもなかったから、花後の黒い果実をいくつか採って食べたことくらいしか記憶にない。校庭の隅の桜の樹の近くに鉄棒があり、二人の若い男の先生がぶらさがったり、話をしているのをよく見かけた。一人は私の5年生の時の担任S先生であった。今一人はA先生で柔道初段との噂があった。2人とも中学校出たての代用教員であったが、1年以内に召集令状が来て2人とも学校を去った。S先生の方が先に応召し、再びもどって来なかった。A先生は樺太で終戦を迎え、何年か抑留された後帰国し、再び小学校に復職したが、新設の定時制

高校に編入して高卒の資格をとり、新制大学北大に合格して小学校を辞めた。入学の春、角帽をかぶって父の所へ挨拶に見えた時、私もその角帽をかぶらせてもらった。A先生はアルバイトをしながら哲学科を卒業された。私は先生に遅れること2年で理類に入り、大学で再びお会いすることが出来た。私がA氏を「先生、先生」と呼ぶので、まわりの同僚にひやかされていた。A先生は哲学科を出てから道新に入り、記者時代を経て中枢の一角にのぼられた。私は教養部時代に「ソクラテスの弁明」の文庫を借りたり、記者の先生について道議会を傍聴させてもらったりした。「停滞は退歩ではない。停滞は進歩の前提である。」など、教えられることが多かった。西洋哲学史などを読むようになったのは、先生の影響だと思う。先生はすでに退職されて札幌に住んでおられる。10年程前に尋ねて行きお会いしたのみである。

大学時代、学部に移行した翌年5月、恒例の観桜会が円山の北海道神宮横で催され、夜桜の下で酒盛りが始まった。同期のM君はへべれけに酔い寝こんでしまった。宴が終わっても起きるものでない。彼と下宿が近かったので、彼のそばで酔いをさましながら眠ざめるのを待った。終電近くの電車の中でも、彼は酔眼朦朧として醒めやらず、見かねた乗客が席をゆずってくれた。やっと彼の寮に連れて行き寝かせた。昨年の同期会に彼も見えて、桜の話から今の話をしたところ、全々記憶にないと云う。「そんなことがあったのか、よく憶えているね。」私は彼の酔いっぷりにむしろあこがれたのかも知れない。私は彼のように酔ったことは皆無に等しい。消化系を弱くしてしまっただけは常にほどほどになり、これは性格にも影響していると思う。

桜の話は更に続く。湯本の席で大阪出身のA氏が「北海道の桜は葉が出て花が咲くだろう。あれは美しいとは云えへん。気になってしょもなかった。」と発言した。云われてみると花の時期に葉も見られる。それがあたり前と気にもしなかったが、以前弘前城で見た桜は、花一杯の記憶がある。宿から見える湯本の桜も、遠目だが葉は見えなかった。私が見なれている桜はエゾヤマザクラである。弘前や湯本の桜に比べると色が濃いと思う。

桜は種類が多く、園芸種まで含めると300種ほどになるという。とうてい私の手におえるしろものではない。高校生物教科書の学名・和名の例に、*Prunus yedoensis* Matsumura ソメイヨシノが載ったことがある。30数年教師をつとめて、サクラの学名が使用教科書に登場したのは、これだけである。昭和38年東書発行の教科書である。最近教科書の視点が移り、分類は昔ほどくわしく載らなくなった。分類は総合だからむしろきちんと教えることが大切だと思う。

後日談になるが、今年の秋一巴に行く機会があって、旧一巴小学校のあった桜坂に行ってみたが、あまりの変化に懐しさの感覚は失せてしまった。農業高校としても50年近くの歴史を経てしまって、懐しさのつけ入るすきはなかった。私は校庭に立たずんではみたものの、落ち着く気持にはなれず校地からそそくさと出てしまった。只、校庭下の小川は同じ位置を流れていた。

砂漠と氷河を旅して

星野 フサ

出発前

夏休み中に北京で国際学会が開かれるということを知り重い腰を上げる決心をしたのは、2年前のことです。

それなのに毎日のように行こうか？止めようか？とうじうじ悩んでおりました、、、。それというのも私はまだ一度も海外旅行というものをしたことがなかったのです。白髪が増える年になったのに、我が職場で海外旅行の経験が無いのは私だけという情けない日頃の思いも重なって私は一生一代の大決心をしました、、、。ひとりで出かけてみよう！ということで大変な緊張の下、10日間の中国の旅にでかけました。

日本を離れて、、、

1991年8月10日10時成田発の飛行機は離陸しました。その飛行機の私の隣の席は男性でした。その人は、ジャイカで中国人に酪農技術の指導に再び行くとのことでした。中国の人達とは政治問題

について話しをあまりしない等よもやま話しをしているうちに北京の飛行場に着きました。赤い大きな横幕を見て私は共産主義者の方々に歓迎されているな、、と感じつつ税関を通過しました。待合室の向こうには紙きれを持った人達のくろやまです。INQUAの歓迎は無く、ちょっと寂しい思いをしました。5人位の人垣で歓迎されているのはあのジャイカの男性です。

ホテルまでどうやって行ったらよいか、、、一人旅は心細いものでした。飛行場の出口の所でお世話になった在中国滞在の日本人の方の親切は忘れられません。彼に換金の方法を教わり、タクシーで北京のホテルにやっとのことで到着しました。

北京に着いて

ホテルでは、日本人に顔つきがそっくりなのに英語でなければ話しが通じませんでした。フロントの男性や女性を眺めて日本人と中国人の古代からの血のつながりを考えずにはられませんでした。フロントに英語のよく解る女性がいたので、とても助かりました。北京から西へ2,500kmほど離れた巡検の出発地点ウルムチまでの切符は、INQUAの役員の方々にお金を払って予約してありました。そのウルムチ行の飛行機の旅券を、北京のBICC（ここは、日本の地質調査所に当たるような所です。）で受け取らなければなりません。それで、タクシーでBICCまで連れていってもらいました。その玄関前広場には、10数本の赤旗が翻り本当に驚きました。その帰り道で天安門前広場を通りました。おびたしい赤旗の横幕をこえて、その向こうに毛主席の巨大な写真がみえてきました。その広場はがらんとして日本の日の丸と中国の旗が交差して立てられているのが目に入ってきました。実はこの日、日本の海部首相が北京を訪問していたのです。この日、私は日の丸に対して日本で感じたことのない懐かしさを感じました。BICCで旅券を受け取りました。私は中国の確認というシステム一切符を買ってお金を払って切符を受けとっていても、確認の連絡をしていない場合は無効であるという制度一を知りませんでした。そのためにもう少しで切符を失う所だったのです。日本代表の太田先生の判断に救わ